令和４年度中間期自己評価書

令和４年８月　愛南町立城辺小学校

【評価基準】
Ａ：目標を達成　　Ｂ：８割以上達成
Ｃ：６割以上達成　　Ｄ：６割未満

重点目標		目　標	評価者	目標値 肯定90%以上		判定	考察(◆)と改善方策(◇)
1	社会総がかりで取り組む教育	1 CSの研究と実践による開かれた信頼される学校づくりを行う。	教職員	100	A	A	◆おおむね肯定的に捉えられているが、昨年度に比べると、保護者の肯定率がやや下がっている。 ◇今年度も教育活動が制限されることが多いが、保護者や地域関係者の理解・協力を得て支えていただきながら学校運営ができている。今後も、保護者や地域、学校が連携し、コロナ禍でできることを探りながら信頼される学校づくりに取り組んでいきたい。
			児　童				
			保護者	88	B		
			地域関係者	94	A		
		2 地域の人的・物的環境を活用する。	教職員	86	B	B	◆おおむね肯定的に捉えられているが、評価としてはＢ判定である。しかし、地域関係者の肯定率は高く、学校への協力に感謝している。昨年度に比べると少しずつではあるが、田植えやグランドゴルフ交流会等、地域とのつながりのある教育活動を実施することができている。 ◇１学期、交通安全教室や対面式等をオンラインで実施することができた。今後も、制限がある中でも、地域の人的・物的環境を活用できる方策を模索し、実施していく。
			児　童				
			保護者	87	B		
			地域関係者	98	A		
学校運営協議会委員の所見			○「地域の人的・物的環境を活用する」の目標に対してはＢ判定にはなっているが、保護者、教職員とも当てはまらないのは０％なので、肯定的に捉えられていると考えてよいと思う。いろいろな立場の方々から城辺小学校への協力が得られており、熱心に取り組んでいると感じる。しかし、コロナ禍で学校と保護者の関わりが少なくなっているため、やや肯定率が低くなっているのではないだろうか。 ○コロナ禍で大変だろうが、児童にとっては一つ一つ大切な経験であり、楽しみにしていると思うので、感染拡大防止対策を徹底して、できるだけ行事等を実施してほしい。我々も児童の活動の様子が見られるとうれしい。				
学校の対応			○コロナ禍においてまだ教育活動が制限されることが多いが、「一歩前へ」を大切にして、できることを実践していく。特に２学期は、社会科や総合的な学習の時間等で、地域の人的・物的環境の活用を考えている。保護者の方や地域の方に支援や協力を得ながら進めていく。 ○直接体験・直接交流が望ましいが、状況によっては難しい場合がある。オンラインとのベストミックスを模索しながら、よりよい教育活動を行っていく。				
2	一人一人を見つめ、育てる生徒指導の徹底と健全育成の推進	3 「いじめは絶対に許さない、見逃さない」学校づくりに努める。	教職員	100	A	A	◆教職員・児童・保護者・地域関係者ともに高い肯定率である。 ◇保護者や地域と連携し、いじめに対する共通理解を図っていく。 ◇今後も日常の児童との温かい人間関係づくりに努め、悩みや困り事等を相談しやすい環境を整える。また、学級活動等を通して児童自身のSOS発信力を育てるための手立てを講じる。 ◇定期的に生活アンケートや教育相談を行うことにより実態を把握し、いじめの早期発見に努める。
			児　童	96	A		
			保護者	93	A		
			地域関係者	94	A		
		4 「凡事徹底」と規範意識の醸成を図る。	教職員	100	A	A	◆教職員・児童・保護者・地域関係者ともに高い肯定率である。しかし、挨拶については課題がある。また、地域での生活や遊びについての問題も指摘されている。 ◇保護者や地域と連携を図りながら、今後も挨拶や規範意識について継続して指導していく。具体的には、保護者や地域からの情報収集に努めるとともに、「城っ子のきまり」を再確認させ、徹底する。
			児　童	93	A		
			保護者	90	A		
			地域関係者	94	A		
学校運営協議会委員の所見			○全体的にＡ判定で高い肯定率になっている。児童のアンケートで、１％ではあるが「学校は、楽しい。」に当てはまらないと答えている児童がいることに目を向ける必要があると思う。当てはまらないと答える児童が０％になることを目指してほしい。生活アンケートでいじめや困ったことなどを、先生に相談しやすい環境になっているのでいいと思う。これからも児童が相談、発信のできやすい環境づくりをお願いしたい。 ○個々の考えを「そんな考えもある」と捉え、いいところを見付けたり、場に応じた話合いができたりするとよいのではないか。 ○地域での挨拶は中学生の方ができる。まずは地域の人から声を掛けるようにすると、次第に挨拶が返ってくるようになり、自分から挨拶するという「挨拶の基盤」ができてくるのではないか。				
学校の対応			○何より「学校が楽しい」「自分の子どもは楽しく学校生活を送っている」と児童も保護者の方も言ってもらえるような教育活動を進めていく。そのためには、家庭、地域との連携が必要不可欠である。 ○悩みや困り事等を相談しやすい環境を整え、児童がSOSを出しやすい手立てを日常的に講じていく。 ○挨拶については、校内での指導はもちろん、教職員が登校指導等で地域に出向き、地域の方に一緒に挨拶をすることにより、改善を図る。				

【評価基準】
A：目標を達成　B：８割以上達成
C：６割以上達成　D：６割未満

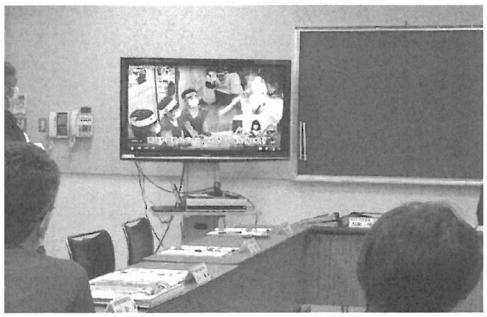
重点目標		目　標	評価者	目標値 肯定90%以上		判定	考察(◆)と改善方策(◇)
3	確かな学力、豊かな心、健やかな体を育てる教育の推進	5 授業力の向上（主体的・対話的で深い学び、個に応じた指導、ICT活用）を図る。	教職員	100	A	A	◆全体的に高い肯定率である。新型コロナウイルス感染症関連でオンライン授業を活用する事例が多かった。登校することができなくても、なるべく早く対応し、可能な限り学習の機会を保障してきた。学習用端末を活用した授業を行うことにより、児童は主体的に学習に取り組み、満足感を感じている。 ◇ICTの活用を進め、補充学習を継続し、学習内容の定着に努め、学校内での状況や情報を保護者に発信していく。
			児　童	95	A		
			保護者	83	B		
			地域関係者	98	A		
		6 家庭学習の習慣化に努める。	教職員	93	A	C	◆教職員は高いが、児童、保護者はともに低い肯定率である。宿題として出しているけれど、学年別の家庭学習の目安時間が達成できていないため、評価が低くなっているのではないか。 ◇目標の学習時間を意識して家庭学習をするように、児童や保護者に再度周知する。また、教職員も家庭学習の目安時間を考えて、宿題を出すようにする。 ◇質問内容の検討（教職員の家庭学習と家庭読書が一緒になっているので分けて集計する。）
			児　童	77	C		
			保護者	76	C		
			地域関係者				
		6 家庭読書の習慣化に努める。	教職員	93	A	C	◆教職員は高いが、児童、保護者はともに低い肯定率である。学校で朝読書や隙間時間などではよく読書をしているが、家庭で読書をしている児童は少ないのではないかと思われる。 ◇学期に一回程度、週末親子読書を宿題として、読書時間や機会の確保に努める。 ◇質問内容の検討（教職員の家庭学習と家庭読書が一緒になっているので分けて集計する。）
			児　童	69	C		
			保護者	54	D		
			地域関係者				
		7 道徳教育の充実と自他のよさを認め合う集団づくりに努める。	教職員	100	A	B	◆おおむね肯定的に捉えられているが、評価としてはＢ判定である。生活アンケートで挙がってきている児童の悩み事にはその都度対応している。 ◇機会を捉えて教育相談を行い、児童が相談しやすい環境づくりに努める。 全教育活動を通じて道徳教育の推進と相手を思いやる「優しい言葉」を使える児童の育成に努める。 ◇質問内容の検討（質問項目６（保護者）ははずしたほうがよい。）
			児　童	88	B		
			保護者	87	B		
			地域関係者				
		8 自己の体力向上・健康保持増進に取り組む態度を育成する。	教職員	93	A	B	◆おおむね肯定的に捉えられているが、評価としてはＢ判定である。マスク生活もおおむね定着しており、感染症への意識が高まっている。感染症対策で、外遊びの時間が減ったり、マスク着用や暑さで外に出たがらなかったりして、児童の体力は落ちていると感じるが、放課後水泳練習や陸上練習などへ取り組む児童は増えており、児童の運動への関心の高さがうかがえる。 ◇休み時間や昼休みに教室にいる児童に、外で遊ぶように積極的に声を掛ける。縄跳びやマラソンなど、家庭や個人でできる体力づくりの奨励に努める。 ◇生活習慣を整えるように、学級での指導内容等を学校・学級便りで家庭に啓発する。
			児　童	88	B		
			保護者	87	B		
			地域関係者				

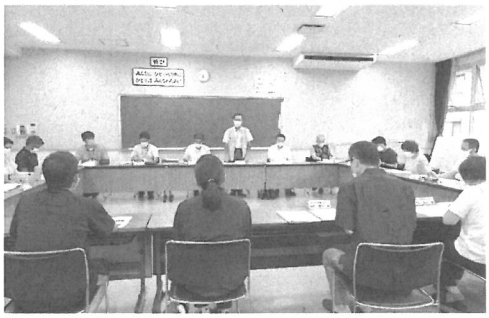
学校運営協議会委員の所見	○目標６について、宿題をしていたら家庭学習の目標時間を達成できると思うが、保護者・児童があまり時間を意識していないのかもしれない。 ○家庭においてはいろいろな誘惑が多いので、家庭学習・家庭読書の習慣化は難しい。理想としては、児童自ら興味を持って取り組めるように、宿題等を含む家庭学習の充実を図り、宿題等のフォローもしてもらいたい。 ○時代に合った教育をよくされており、児童は安心して登校できている。
学校の対応	○家庭学習、家庭読書ともに時間管理ができていないのではないか。家庭は学校より誘惑が多い環境なので、集中して取り組めるように、家庭への協力を求めていく。 ○特に読書については、週末親子読書やＰＴＡ教養部の「本の福袋」の取組等により、読書の時間や機会の確保に努める。 ○学習用端末を持ち帰って課題に取り組むことを増やしている。それぞれの興味・関心・意欲等に応じて取り組めるという利点を生かし、更に学習用端末の可能性を研修していく。

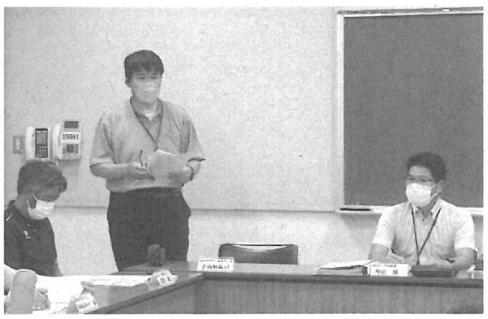
【評価基準】
A：目標を達成　B：８割以上達成
C：６割以上達成　D：６割未満

重点目標		目　標	評価者	目標値 肯定90%以上		判定	考察(◆)と改善方策(◇)
4	地域と連携した安全教育の充実と安全・安心な教育環境の整備	9 家庭や地域、関係諸機関との連携・協力に努める。	教職員	94	A	A	◆全体的に高い肯定率である。学校長の登校指導や通信、ホームページ等での発信が伝わっている成果ではないだろうか。 ◇学校便りやホームページ等で継続的な情報発信を行う。通学路・学校施設など、教職員は常に「安全かどうか」を考え、点検を行う。また、保護者や関係機関等との連携・協力を密にし、情報を得るようにする。
			児　童				
			保護者	95	A		
			地域関係者	96	A		
		10 系統的実践による危機回避能力・対応力、自助・互助・共助の育成を図る。	教職員	100	A	A	◆全体的に高い肯定率である。 ◇学級活動、避難訓練、交通安全教室等を通じて、安全な過ごし方について具体的に指導する。インターネットサイトを利用して、危機察知能力を高める。 ◇保護者や地域の方々とも協力しながら日常化した「避難訓練」「交通安全指導」等を実施する。
			児　童	98	A		
			保護者	99	A		
			地域関係者	100	A		
学校運営協議会委員の所見			○登校中危ない様子があれば、地域の人から学校に連絡が入って、子どもたちへすぐに指導されるのは、連携が取れていてとてもいいことだと思う。 ○インターネット利用のゲーム等において、課金等の問題が心配である。 ○防災教育については、まず落ち着いて行動することが重要である。新しい考えを取り入れつつ、リスクが少ない場面を考えて、実践につなげていってほしい。 ○できるだけ機会を捉えて防災活動、安全運動に参加できるようにしたい。				
学校の対応			○夏休みの課題として、親子で避難所の確認・通学路の点検を行った。課題点について共通理解を図り、対応できるものは地域や関係機関等と連携を図って対応していく。 ○インターネット利用のゲーム等について、「家庭でのルール」が徹底できていない家庭が見受けられる。学校でもその危険性等について指導し、家庭でも「家庭でのルール」をしっかりと話し合ってもらい、きちんと守れるように啓発していく。 ○避難訓練（地震）については、余震や教室内待機の訓練等を取り入れながら進めていく。				
5	人権・同和教育と特別支援教育の充実	11 差別の現実に学ぶ研修と実践に努める。	教職員	100	A	A	◆教職員・児童・保護者ともに高い肯定率である。道徳科や学級活動での指導や常時のわかたけ委員の活動を通して、児童に人権意識を育てることができたと考える。学校便り・校長ブログ・学年便り・ホームページ等で、保護者・地域関係者に発信したことがこの結果につながっていると考える。 　また、教職員の研修会において、人権・同和教育に関する研修・人権啓発室や大森文化会館が主催する研修会等に参加することにより教職員の意識も高まった。 ◇今後も研修に努め、人権・同和教育指導計画を基にしながら、差別の解消につながる意欲や態度・技能を持った児童の育成に努める。また、校区別人権・同和教育懇談会（参観日）で人権・同和教育に関する内容を授業公開し、学校・保護者・地域との連携・協働に努める。
			児　童	95	A		
			保護者	90	A		
			地域関係者				
		12 児童一人一人の教育的ニーズを把握した組織的・継続的な指導・支援に努める。	教職員	100	A	B	◆全体的に高い肯定率である。児童アンケートの中で「先生に相談できる」という項目が80%を少し上回り、昨年度のCからBになった。先生に相談できにくいと答えた18%の児童も大切にする必要がある。 ◇懇談会、参観日アンケート、電話連絡や学校運営協議会等を利用して保護者や地域関係者が望む「児童一人一人の教育的ニーズ」の把握に努め、指導・支援に役立てていく。 ◇定期的な生活アンケートや教育相談を活用しながら、普段から「先生に相談できる」人間関係づくりや雰囲気づくりに努める。また、学校として「いつでも、だれにでも」相談できる体制が整っていることを児童にも保護者にも具体的に周知する。 ◇特別支援教育コーデイネーターの指導の下、個別の教育支援計画と個別の指導計画を作成している児童だけでなく、「困り感」のある児童に対しても、学校内だけでなく、保護者や関係諸機関と連携しながら、組織的に対応していく。
			児　童	82	B		
			保護者	87	B		
			地域関係者	95	A		
学校運営協議会委員の所見			○先生に相談できにくい児童は、先生に相談すると自分も怒られるという気持ちがあるのかもしれない。 ○児童が相談できる環境づくりに、先生方はよく努めていると思う。 ○そっと手を差し伸べる、人を思いやる気持ちが大切ですね。 ○校訓の徹底指導を図ってほしい。				
学校の対応			○人権・同和教育の充実については、校長、人権・同和教育主任を中心に、校内研修会や人権・同和教育懇談会の実施、地域への啓発に努める。 ○特別支援教育の充実については、一人一人の教育的ニーズを把握して共通理解を図り、取り組んでいく。また、個別最適な学びを保障するために、学習用端末の効果的な活用について継続して研修に取り組んでいく。 ○校訓については、英語での表現も児童に浸透してきている。その校訓が常に実践することができるよう、機を捉えて指導していく。				

【評価基準】 A：目標を達成　B：８割以上達成 C：６割以上達成　D：６割未満							考察(◆)と改善方策(◇)
重点目標		目　標	評価者	目標値 肯定90%以上		判定	
6	教職員の資質能力の向上	13 GIGAスクール構想の意義を理解した具体的な実践を生みだす組織的な研修に努める。	教職員	100	A	A	◆教職員・保護者ともに高い肯定率である。 ◆学習用端末・デジタル教科書を活用し、各学年に応じた学習形態を工夫・改善しながら、研修の充実が図られた。 ◇児童に寄り添ったICTを活用した授業等の実践方法を構築し、組織的な研修に努める。 ◇授業で使用し効果的だった取組を次年度に記録累積していく。
			児　童				
			保護者	92	A		
			地域関係者				
		14 教員育成指標に基づく、個人目標の設定とＰＤＣＡサイクルによる自己研鑽に努める。	教職員	88	B	B	◆昨年度は肯定率Ａであったが、Ｂの肯定率に下がった。 ◇引き続き、教員育成指標に基づく、個人目標の設定とPDCAサイクルによる自己研鑽に努める。同時に社会環境が急速に変化する中で、学び続ける姿勢を忘れずに、教育に関する情報収集に努める。「チーム城辺」として見通しを持って、共通実践できるように取り組んでいく。
			児　童				
			保護者				
			地域関係者				
学校運営協議会委員の所見		○GIGAスクール構想の実現のために、先生方も研修等でとても大変だと思うが、子どもたちはパソコンの授業がとても楽しいようだ。 ○教職員の皆さんは、高い目標に向かって努力されていると思う。 ○「チーム城辺」すばらしい。どんな時でも「チーム城辺」で対応をお願いしたい。					
学校の対応		○学習用端末の活用は、日進月歩で進化している。教職員は研修を受講したり、それを校内で広めたりしながら対応している。今後も「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、効果的な活用を図っていく。 ○常に「チーム城辺」という意識の下、学校・家庭・地域の連携・協働に努めていく。					







＜１学期の学校運営協議会の様子＞